憑依妖精騎士

トリ子ちゃん

基本ＣＧ１４枚
差分ＣＧ１７５枚
台詞なし差分収録

聖華快楽書店

「霊基の調整だって言ってたけど、なんなの？こんな所に寝かせがやって」
「あ、はい。もう少し準備に時間がかかりますので、待っていてください」
「ったく、さっさとしなさいよね。私も暇じゃないんだってのに」

「彼女は妖精騎士トリスタン、
そう呼ばれているサーヴァントだ」
「実際の真名はそれとはまた違うらしいが、
末端の職員である俺が詳しい事を知るはずもない。
だが、それでもわかることはある」
「それは彼女がとんでもない
美少女だという事」
「女性のサーヴァントは誰もが美人だが、
その中でもひと目見た瞬間から、
俺は彼女の虜になってしまったのだった」

「早くしろって言ってるでしょ？
このグズ！ナメクジ！」
「ごめんなさい、ごめんなさい！
すぐに終わらせますから！」

「それでいて、荒っぽく生意気な口調や態度。
それもまた魅力的なのだが……
こんな性格の彼女が俺なんかに
見向きもしてくれるはずがない」
「それでも俺は彼女を遠くから
見ているだけでよかった。
それで十分、満たされるつもりだったのだが、
いつしかそれでは満足できなくなっていた」
「もっと彼女と近づきたい、
彼女を感じたい。彼女に触れてみたい。
そんな感情が日に日に強くなっていった」
「そして俺は、彼女を騙してこの部屋に連れてきて、
計画を実行する事にしたのだった」

「よし、これで大丈夫な筈だ！」
「おい、いつになったら始めるつもりなんだよ？」

びくっ!?
すっ…
「んぐっ!? なっ、なにこれっ……!? 私の中に、何かが入って……!」

「あぐがががががっ!!
?あ、頭がっ……!
脳が、割れるっ……!?」
「おかしく、なるっ……!
私が、私でなくなって……!
ぐっ、あがああああっ……!
なんなの、これぇぇぇぇぇぇぇっ!!!!
いぎいいいいいいいいいっ!!!!」

「よしっ……！
上手くいったんだよ、な？」

「意識を取り戻してすぐに俺は視線を
少し下へと向けた。
そこには確かに、トリスタンの体がある。
主観で見る、彼女の体だ。
つまり、俺は彼女になることができた」
「俺はカルデアの職員になれたとはいえ、
魔術師としては三流」
「それはマスターに選ばれなかった事からも
よくわかる。だが一つだけ、得意な魔術はあった」
「それが身の霊魂を抜き出し、
対象に憑依するという魔術だ。
本来ならばゴーレムなどに自分が入って
操作するための魔術だが、上手くやれば他人に憑依する
事もできるかもしれない、と研究を進めていたのだ」

「そして、全てが上手くいった！
今やトリスタンの体は俺のものだ。
もう誰にも奪われはしない！」
「この魅力的な体、声。
その全てが俺のものになったんだ。
好きなようにすることができる」
「元から男っぽい口調で
話す事もあったから、
俺が成り代わっても
きっと上手くやっていけるだろう」

「さて、それじゃあ……
ずっとやってみたかったことを
やらせてもらおうか」

「お、おおっ……！
これがトリスタンのおっぱい！」
「思ったよりも大きいし、
最高の揉み心地だ！
「ヤ、ヤバイ、
ずっと揉んでいたい……！」
むにゃ♥
むにゃ♥
むにゃ♥

「ふっ、あっ、あぁぁっ……！
おっぱい、気持ちいいいっ！」
はっ♡
はっ♡
むにっ♡
むにっ♡
むにゅっ♡
「こんなに乳首で
感じられるなんて、
女の体ってすごいいいっ！」
「いっ、いや、トリスタン自身が
開発してたのか？
エッチな子だな……！」

「クリトリスをいじってみたら、どうなるんだろう……」
びくん♡
「ひふぅっ!?んっ、あっ、あぁあああんっ!!」
「や、やばっ、これっ、すごいいいっ……!体も、頭も、痺れるうううっ！」
むに♡
むにゅ♡
コリ♡
コリ♡
コリ♡

「はぁっ、はぁっ、ふっ、んっ、んぁあぁあっ！！」
はっ♥はっ♥
むに♥むに♥
びくびくっ
ゾクゾクっ
「やばい、やばい、ヤバイっ……！これ、手、止まらないっ！」
「こんなに女の体で感じるのが、気持ちよかったなんて！頭、蕩けるうぅうっ！」
コリ、コリ、コリ、コリ、コリ、

「あぁぁぁぁぁぁっ！
やばっ、イくっ！
イッ、ちゃうううっ……！
「憧れのトリ子の体でっ！
女の快楽を知って、イくうううっ！」
びくっ♡
びくっ♡
ビクビク♡
はー♡
はー♡
むに♡
むに♡
ガクガク
コリ
コリ
コリ
コリ
コリ
コリ

「ふぁぁぁぁぁぁぁぁんんっ!!!
すごいいいいいいっ!」
「イッ、イくの、止まらないっ!
これ、戻ってこれなくなりそっ……!」
びくん
ぐいぐい
ぷしゃあああ♥
びくんっ♥
ガク、ガク
「ふぁぁぁぁぁぁぁぁんっ!
全身ずっと、ビクビク
してるぅぅぅぅぅっ!」

ぞく♥
ぞく♥
「はぁ、はぁっ、す、すごかった……」
「頭の中、焼ききれるかと思った……こんなに、いいんだ。女の体って」
びくん♥
「それに、本当にこの体が手に入ったて実感できたな……」

「よしっ……！
それなら、予定通りに
もっとこの体を楽しもう」
「俺はトリスタンの
体を手に入れたんだ」
「これからはこのエッチな体、
ずっと堪能させてもらうからな……」

「は、ははっ……
元からエッチな衣装着てたけど
すごい服着ちまった」
「いい感じに体に密着して、
それだけで気持ちいい……」
むに♥
もに♥
「んっ……！ふっ、んんんっ……！
この服で、胸揉むのも、いいっ……！」

「こんな美少女になって、
オナニーしまくって……」

「それだけで俺の今までの人生、
報われたみたいだ……！」

むに♥

もに♥

「ひんぅぅっ……！
んあっ、あぁぁっ……！」

「ひふっ、んっ、くっ、んぅぅぅんっ……！」
「こ、これ、いくらでもできるっ……あっ、あぁっ……！」
「いっぱい気持ちよくなって、何度でも、イけちゃうぅぅっ……！」
びくん
むに♥
もにゅ♥むにゅん♥

「こ、これ、女になったら
試そうと思ってたんだよな」
「えぐい形のディルド……
こんなのまんこで咥え込んだら」
「どういう感じなんだろう……？」
ぞくぞく♥
ドキドキ♥

「んぐほおおおっ！？」
「おっ、おほっ、んはひいいいいんっ！
こ、これ、やばぁあああっ！？」
はぁぁ♡
はぁぁ♡
ぐぽ♡
ぐぷ♡
ぐぽ♡
「い、今までのオナニーの比じゃない！
き、気持ちよすぎて、イき過ぎるっ！？」

「ひぐううううんんっ！
んあっ、あっ、あっ、あぁあああっ……！」

「ヤバイ、イくっ！
めちゃくちゃ、イくっ！
すごい強いの、きちゃうっ！」

ガクッ♡ガクッ♡

ぐぷっ♡
ぐぽっ♡

「まんこで、ディルドアクメっ……！
すごく深いの、くるうううううっ！！！！」

「イギまくりゅうううううううううっ！！！？」
びくん♥
びくん♥
はぁぁぁん♥
びくん♥
ぴゅぴゅぁぁ♥
ごくごく♥

「おっ、おっ、おほぉおおっ……！」

「こ、これぇう……
ホントにやばいいいいっ……」

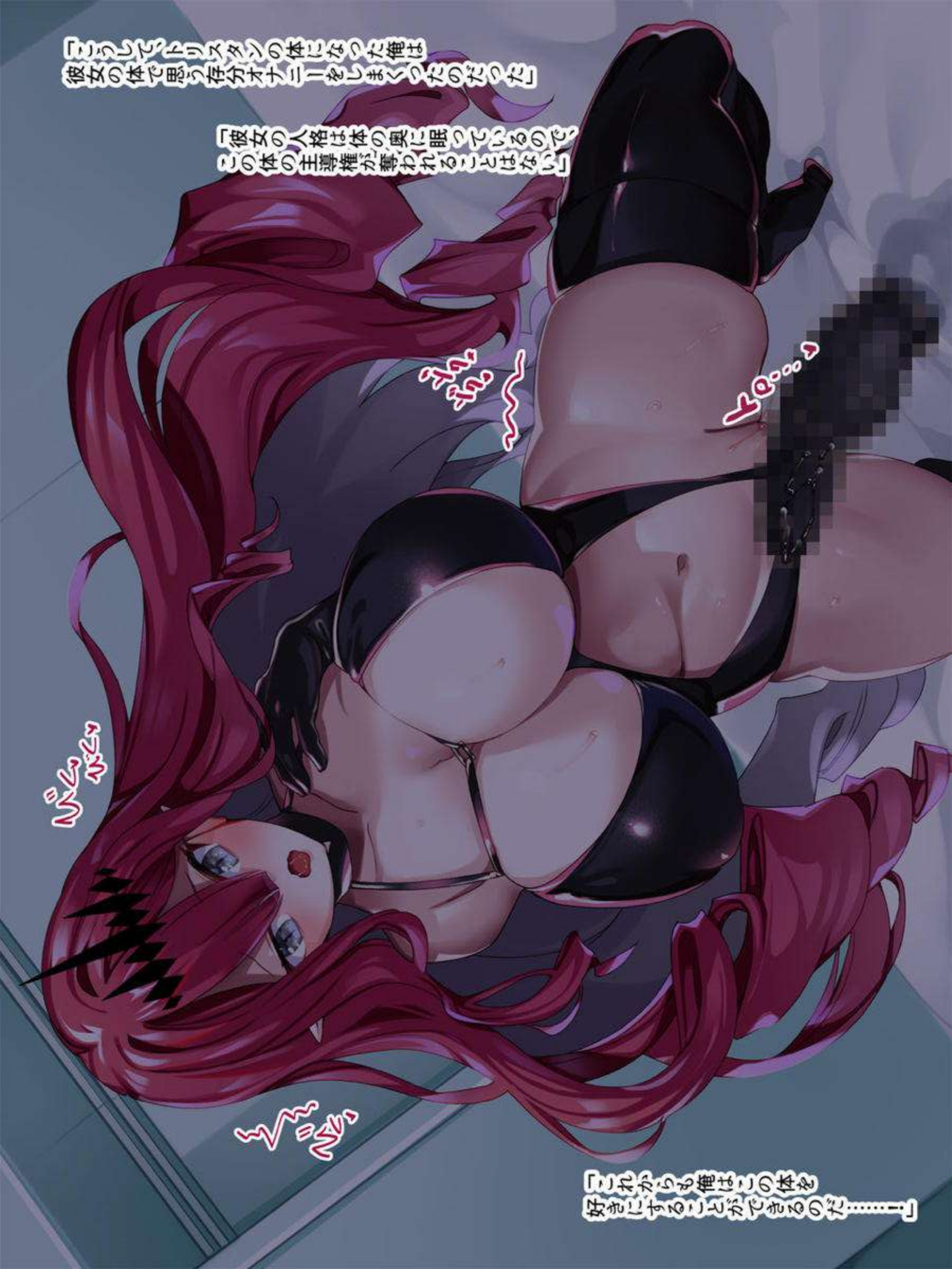
「気持ちよすぎて頭、
ぐわんぐわんするぅっ……」

びくびく

くくくびび

ぶるっ、ぶるっ

とろ…


「こうして、トリスタンの体になった俺は
彼女の体で思う存分オナニーをしまくったのだった」
「彼女の人格は体の奥に眠っているので、
この体の主導権が奪われることはない」
「これからも俺はこの体を
好きにすることができるのだ……！」

「はぁぁぁっ……！生き返るー！」
「思いっきりイきまくって気持ちよかったけど、流石に全身汗と愛液でベタベタだったからな」
「……っと、ちょっとは女言葉の練習もするべきか？」
ヤママママ…

「霊基調整室を後にした俺は、
そのままトリスタンの自室に戻った」
「なお、調整室は俺の管轄だったので
自分の体が持っていた鍵で締めてきている」
ザママママ…
「後、俺の元の体もあそこに
保管したままだ。
いずれなんとかしなければ
ならないが……」
「それよりも今の俺は、
もっとトリスタンの体を堪能したかった」

「私、妖精騎士トリスタンよ。このザーコ♪」
「こんな感じでよかったかな……他の妖精騎士やモルガンをこれで騙せるかな？」
ザァァァァ…
「まあ、俺が入ってるなんて予想もできないか。違和感があってもなんとかなるだろ」

「そうだ、後もう1個、
やってみたいことがあったんだ」
「女の体になったら、シャワーを
自分のまんこに当てるってやつ……」
「それですごい気持ちよく
なれるって話だよな？」

「ふぁあああああっ！？
あ、あぁっ、これ、もすごっ……！」
「ひっ、くぅうぅんっ……！
んあっ、あぁあああっ！」
「す、すごい、どんどん愛液、
出てくるっ……！
シャワーで愛液流されるけど、
それ以上にいっぱい、出てっ……！」
じゃぁ♡

「イッ、ちゃうううううっ！」
「こ、これ、すごっ、すごいぃ いいいっ……！」
「お、女の体って、こんなにいいんだっ……！いや、トリ子だからいいのか？」
ぴと、
ぴと、
は！は！
トプ♥
「へへへへっ、スケベなメスガキってオナニーしててわかったもんな……！」

「憧れのトリスタンの体を手に入れた俺は、全てに感動していた」
「男として生きてきた中では知らなかったことだらけだし、全てが気持ちいい」
「こうして俺は更にトリスタンの体を堪能して、ずいぶんと長いシャワーを終えた。すると……」

「バーヴァンシー。
随分と長くシャワーを浴びていたようだな」
「モルガ……お、お母様！？
ど、どうしていらしたの？」
「どうしても何も、
今日の予定だっただろう。
お前が来るのが遅いから来たのだ」
「あ、ああ、そうだったわね。
私としたことが、忘れちゃっていたわ」

「突然、モルガンが部屋を訪ねてきた……！？」
「どうやら、何か約束があったらしい。
二人は親子？らしいからそういうこともあるか」
「後、バーヴァンシーというのが
正しい真名なのか？
偶然にも重要な情報が手に入った」

「お、お母様！？
いきなり服を抜いでどうしたの？」
「どうしたも何も、
いつものをするという話だろう」
「あ、ああ、そう。
いつもの、よね……！」
「……？
どうしたバーヴァンシー。
調子でも悪いのか？」

「ではお母様、
お相手させてもらいますね」

「んっ……！はっ、あぁっ……！
なんだか、手付きが変わって……
んんっ！？」

「私も色々と勉強したのよ♪
お母様を喜ばせるためにね」

「んっ、んっ、だ、だがっ、
これはっ……！ふぁああっ！？」

くちゅ…♥

「ふふっ、しっかり感じてる
お母様、可愛い♪」

「あっ、あぁっ、あぁぁぁあんっ！
ど、どうして、こんなに上手くっ……！
んぁあああんっ！」

「だからぁ、お母様に喜んで
もらうためだって♪」

「け・ど。あんあん言ってるお母様ってば、可愛すぎ♪
その辺りのザコ女みたいじゃない♪」

「あっ、あっ、あぁぁっ……！
イ、イくっ！バーヴァンシー、
も、もうっ、うっ、くううっ……！」

「わぁ、お母様ってばもうイくの？
可愛いイキ顔、早く見せて♪」

びくっ

あ

ぶるぶる

あっ

むにっ

ちゅくっ

くちゅ

くちゅ

ちゅくっ

「イくイくイくイく
いくっ……！イッ……！」

「イッ、くううううううううっ！！！」
「わぁっ、お母様ったら、トロットロの顔でイッちゃった♪」
「こんなに無様にイッちゃうなんて、素敵過ぎるわ♪」
ぶしっ♪
ぶしっ♪
がくがく
パシャッ♪

「あ、あ、あぁっ……
も、もう、いい……私は、帰る……」

「えぇっ、そんなつまらないこと言わないでよ。
私はまだ気持ちよくなれてないじゃない」

はっ♥はっ♥

「し、しかし、この状態では……」

「あははっ、ヘロヘロの
母様ってばかーわーいー！」

「正直、俺はあまりモルガンのことを
知らなかったんだが、予想よりずっと楽しんでいた」
「当然、元の俺ではこんなことできていなかったんだから、
この体になれてよかった」
「そして同時に、このままモルガンと
もっと楽しみたいと思ったのだった」

「ほら、お母様。もっと楽しみましょうよ」
「ひくっ……!?んっ、んあああっ、あ、ぁあっ……!」
「あははっ、お母様ってば、まだ細かくイッてるの？ホントにクソザコまんこなんだから～」
びくっ…
くちゅ…♥

「ふふふっ、お母様のぬれぬれまんこ
私にも感触が伝わってくるわ。
こんなに　濡らしてるなんて」
「あっ、あぁあぁっ……！
バーヴァンシー……！」
「本当にもう、いいからっ……！
やめなさいっ……！」
「そんな酷いこと言わないで、お母様。
私がイくまで付き合ってくれなきゃ
つまらないじゃない」
「お、お前が一人で自分を
慰めればいい、だろうっ……！
だから、もう私はっ……！」
マチ
クチ

「ダーメ♪
自分だけ満足して終わりなんて寂しいわ。
いくらお母様でもそんなの許せないもの」
「あっ、そうだ、
これからお母様のおまんこで
オナニーしちゃうわね♪
それでいいでしょ？」
「なっ……
そ、そんなのっ……
ふぁあぁあっ……！！」
はっ
はっ
マチ
クチ♥

「ほら、ほら、ほらぁあっ……！
お母様のぬれぬれまんこ
いっぱい味わっちゃうから♪」
「んくっぁあああっ！
あっ、あぁああっ、んっ
んぁあああんっ！」
くちゅ
ぬち
にちゅ
「きゃーっ、感じまくってる
お母様可愛いー！
んふっ、あはっ、んぁあっ……！」

「俺はまるで男のモノを打ち付けるかのように、激しく腰を打ち付けていく」
「自分の股間がモルガンのそれと激しく擦れ合って、自分にもすさまじい快楽が迫ってくる」
「まんこを擦り付け合う、貝合せと言うんだったか。なんとも魅惑的なプレイだ」
くちゅ
ぬち、にちゅ♥

「も、もうっ、ダメっ……
イくの、止まらないっ！
わ、私、私っ……！
あ、あぁあああああっ！」
「んふふっ……！
お母様のアクメまんこで
私もいっぱい感じるわっ！」
「ほら、イけっ！
イけよっ、お母様っ！
娘のまんこでイきまくれっ♪」
ぶしゅ
ふーふー♡
あ♡
「ふっ、あっ、
あぁあああああっ！」

「イッ、くぅううううっ！
イくの、止まんないのぉおおおおおおっ！！！！」
ビクッ
びくっ
ドプッ♥
ドプ♥
ガクッ
「うわっ……！す、すごい愛液、
私の中にもっ……！」
「お母様のあっついの、
いっぱいくるっ……！」

「あっ、やばっ、クるっ……！
私も、イくっ……！
お母様のまんこでっ、あぁっ……！」
「イッくぅぅぅぅぅぅぅっ！！！！」
プシャァァ♡
びくん♡
びくっ♡
びくっ♡
びくっ♡

「はぁぁっ！
はーっ、はーっ、はぁぁっ……！」
「ふぅーっ、
オナニー以外で初めてイッたな……
っと、お母様？」
「ははっ、イきすぎて失神してるみたいだ。
今まで意外とぬるいエッチしかしてなかったんだな」
はっ
はっ
ビク
がくがく
トロ…♥

「それからしばらく、
俺は失神したモルガンをオカズに、
更にオナニーしたりしていた」
「そして、やがて彼女が
意識を取り戻すと
シャワーを浴びて、
気まずそうに去っていった」
「これからも彼女は
俺の性処理相手として使えそうだ。
すっかり立場逆転だな」

「うっ、ぐううううっ！？
な、なんだ、この感覚……！
頭が、割れそうだっ……！」
ズキッ…。

「トリスタンの体を手に入れてから
数日、俺は彼女としての生活を堪能していた」
「だがある日、突如として
頭が割れそうなほどの頭痛に
襲われたのだった」
「考えることもできないほどの激痛の中、
必死に原因を探る」

「まさか、元の意識が目覚めようとしているのか……？」
「今まで元のトリスタンが感じたことがないような刺激を感じていたからな……」
「絶対に目覚めないという訳じゃないんだし、十分にありえる……！」

「このままでは
体を奪い返されてしまう……！」
「慌てた俺は、すぐに
霊基調整室へと向かった」
「あそこには俺の元の体がある、
それを使って……！」

「なっ……！？
な、何が起こったの……！？」
「あら、お目覚めみたいね？
ノロマのナメクジ男♪」

「はっ！？
なんで私がいるの……？
というか、この体、誰っ……！？」
「う、うそ、気持ち悪っ……！？
誰だよ、この体！
こんなの私じゃないっ！？」
「何バカなこと言ってるの！？
このクソ男♪
見苦しいんだけど」

「お前！
まさか、人の体を
奪ったのか！？」
「このゴミ野郎っ！
返せよ、人の体っ……！」
「うーわ、何訳のわからないこと言ってるの？
こっちの方がキモくて不快なんだけど？」

「よし、無事に上手くいった。
俺はトリスタンの魂を自分から
取り出したのだった」
「そして、その魂を
今度は元の自分の体へと入れ込んだ」
「その結果、トリスタンは
俺の体で目覚めたという訳だ」
「これでこの体を奪い返される心配はない。
そして、後はこいつを排除すればいい。
元は俺の体だが、今はこの体があるのだから」

「聞いてるのかよ！？
返せよ、このクズ野郎！」
「さっきからゴミ
がうっさいわねぇ」
「俺の体と一緒に消えなさいよ。
元バーヴァンシーちゃん♪」

「う、うわぁっ……!?」
「あははっ、こんな時でも
しっかり反応して勃起してる♪」
「全く緊張感ないなんて、
さっすがクズ男♪」
「な、何するんだよ、
このっ……!」

「こうしてやるのよ
変態職員さん♪」
「ふぁぁっ!?
な、何、これっ……!?
ゾクゾク、ビクビクするぅうっ!?」
にゅぢ♥
「ふふっ、初めてのちんこの感覚、
楽しみなさいよ。
これから一生の付き合いに
なるんだけどね」

「ふぁあああっ……！
あっ、なに、これええっ……！
全身、しびれ、てっ……！」
「ほーら、シーコシーコ、
シーコシーコ♪
男ちんぽでイけっ、イッちゃえ♪」
しーこ♥ しーこ♥
しこ♥ しこ♥
「おっ、ほぉおおおっ……！
こ、これが、男の、ちんこっ……！？
キモい、キモいキモいキモいいっ……！」
「あははっ、そんなに嫌ってあげないでよ？
これからあんたはこの体で生きていくのよ」

「なっ!?
じょ、冗談じゃねぇっ……!」

「冗談な訳ないじゃない?
あんたはサーヴァントにちんぽしごかせてるのよ?
そんな変態、ここにいられる訳ないわ」

にちっ♥

にゅちっ♥

「ここを放り出されたら、
体を取り返す機会も一生なくなるわね?
ま、せいぜいその体で楽しくやってよ」

「お・じ・さ・ん♪」

「うっ、くぁあああああっ!?
や、やばっ、何か、来るっ……!
うぅっ、くぅうううっ!?」
「あはは、イッちゃうんだ?
ほら、さっさとイけよ、クソザコ野郎。
サーヴァントに手コキさせて、精液漏らせ!」
は♡
は♡
ぶびゅ♡
ぶびゅ♡
ぶびゅ♡
「イッ、ぐぅうううっ!!
お、男の体で、イッ、ぎゅうううっ!?」

「あふぁあああああああんっ！！
出ちゃうぅぅぅぅっ！
出るの、止まんないいいいいいいっ！！！」
「あーぁ、思いっきり漏らしちゃった。
床こーんなに汚して、キモッ！」
びくん♥
びくっ♥
「おっ、おおっ、おぉおおおっ……！
こ、こんなの、知らなかったぁあああっ……
すごすぎ、るぅぅぅっ……！」

ギシ…♥
「うあっ！？
こ、これ以上、何するんだよっ……！？」
「私の体にお前が精液を出したって証拠、
しっかりと残すのよ。絶対にお前を追放
できるようにね」
「なっ……！
じょ、冗談、でしょ？
全部ウソよね……？
うっ、くぅっ……！
振りほどけないっ……！」
「無駄無駄。
サーヴァントの力に
ただの人間が勝てる訳ないでしょ」

「んっ……！
あむちゅううっ……！」
「ふぁあああっ！？
な、何、これええっ……！？
あっ、ひいいいいんっ！」
ちゅうう♪
じゅぽ♪
ちゅず♪
「ふむちゅううっ！！！
んちゅるううっ、ずるちゅっ、
ちゅぱちゅっ、ちゅずずずっ、
ちゅぷぁっ！」

「ずるるちゅうううっ！
んーちゅっ、ちゅるるるっ、
ずるるぅっ、ちゅぱっ、
ずっ、ずるるずぅうううっ！」
フリ♡フリ♡
じゅぽ♡
ぢゅるる♡
じゅぷ♡
「ふっ、んぁあああんっ！
こ、これ、すごぃいいいいっ！！
イッちゃうっ！またすぐ、出ちゃうっ！」
「いやなのに、もうイきたくないのにっ……！
わ、私におちんぽ舐められてっ、
いやなのにっ、イくうううっ！」

「ふぁあああああん！
出るぅうううっ！！
出ちゃうううううっ！」
「んっ……！んごくっ、
んれるちゅうううっ！
ちゅぱちゅっ、ちゅっ、じゅっ、
じゅれるじゅうううっ！」
ドピュルルルル♥
ドプッ♥
ビクビク♥
「うくぁあああああっ！
精液、吸い取られて、
口の中、ぷるぷるしてええええっ……！
まだ、気持ちいいのおおおっ！！！」
ぎゅるるっ…
ぐぐぐ

「あーあ、こんなに口の中に精液ぶちまけて、キモッ。さっさと死んじゃえば？」
「あ、あ、あぁぁっ……こ、こんなの、よすぎるぅうっ……はぁっ、はぁっ……」
「ホントに気持ち悪いんだけど。はぁはぁ言い続けて」
はっはっ
ぶぐ
ぶぐ
ドロォ…♥

「俺自身でも不思議なことに、
俺は俺の体で感じまくるトリスタンを
本気で見下していた」
「女の体を手に入れて、
結果として男の滑稽さや
汚さを強く感じるようになって
しまったのかもしれない」
「中身は憧れだったはずの
トリスタンそのものなのに。
今はただ、醜悪な男にしか
感じられなかった」

「ふぁあああっ！？
ま、まだ、やるのっ！？」
「んっ、ふふっ……！
ふっ、んぁあああっ……！」
ぬーぽん♪
キュンっ♪
「ふ、ふふっ、この体で男のを
受け入れるのは初めてだけど、
こんな感じなんだっ……！
ディルドよりすごいかも」

「ほら、ザコちんぽ！ほらぁあっ！
さっさと感じてイッちゃえば、この！」

「ひっ、くぁあああんっ！
だめ、ダメぇええっ！
ちんぽ、感じちゃうっ！
おまんこで感じてっ！
んぁあああっ！」

にゃちゅ♥
にゃっ♪
にゃぷぷ♪

「すっかりちんぽ落ちして
情けないわね？
よくやるわ、本当に」

「ほらっ、さっさと私の中に
精液ぶちまけたら？
そしたら正真正銘、職員失格よ」
「お前はここから追い出されて、
一生、体を取り戻せなくなる」
ぎゅにゅ♪
ぎゅにゅ♪
ぎゅにゅ♪
はっ♪
はっ♪
はっ♪
「ま、大好きなちんぽと仲良く
やっていったらいいじゃない。
いくらでもオナニーでもしてれば？」
「い、いやっ、そ、そんなの！
絶対に体を取り戻して、
また、お母様と……！」

「あはははっ、安心しなさいよ。
お母様とは私が仲良くしていてあげるから」
「ねぇ知ってる？
この前はお前の代わりに
お母様といっぱい楽しんだのよ」
ずにゅ♥
ぎゅぷ♥
ぎゅぷぷ♥
ぐちゅ♥
ぐちゅ♥
はっ♥
はっ♥
はっ♥
「お母様ったらとっても楽しんでくれて、
お前とするよりずっと楽しかったみたい」
「う、うそ……
そんなことない……
お母様は、私の……」

「んんっ……！
ひっ、ふぁあああんっ！！
イイッ、いいわよ、このちんぽ！」
「ほらぁっ、私のディルド代わりになって、
しっかり感じさせないよ！
それでさっさとイけっ！このグズ！」
はっ、はっ
パン
パン
パン
パン
ズチュ
ズプ
ズチュ
「ひゃうううううんっ！
で、出ちゃうううっ！
出しちゃダメなのにっ……！
お母様を、守りたいのにっ……！
んっ、んぁあああっ！」

「ふぁあああああんっ！
く、来るっ、出されるぅうううっ！！」
ドピュルルルルルル♥
ずくっ
ずくっ♥
「いやぁあああああ！
しゃせー、止まんないのぉおおおおおっ！」
「んふぁあっ……！
あっ、あぁっ、これ、私も、
イくっ！イッちゃうぅうううっ！」

「はぁ、はぁ、はぁっ……！
初めての男とのセックス♪
悪くないわね」
はっ♡
はっ♡
はっ♡
ドロ…♡
「はぁ、はぁ、はぁぁっ……
出ちゃった……私、自分の中に、
精液出してっ……」

「ふふっ、お疲れ様。
お前の人生もこれで終了な♪」
「うそ……そんな訳、ないっ……
追放されるのは、お前の方……」
「バカ言わないでよ。
この体はもう私のもの。
誰がどう見ても妖精騎士
トリスタンじゃない？」
ドロ…♡
「という訳で、これから
他の職員を呼んでくるわね。
変態に襲われたって
泣きついてくるから」

「そのまま俺は部屋を抜け出し、
膣口から精液を垂れ流したままで
他の職員に泣きつく」
「そうして、サーヴァントに
猥褻を働いた元の俺は
追放されることになったのだった」

「さようなら、レイプ魔♪
もう二度と帰ってくんなよ♪」
「ありえない、ありえない、
こんなの……！
どうして、どうして私が……！」
「安心してよ。
この体はきちんと使ってあげるから」
「あなたの大切なお母様とも
ずーっと仲良くしているわ。
だからいいでしょ？　……ね？」

「こうして、
俺は無事に元の俺を
追放することに成功した」
「もしも彼女が俺に
優しくしてくれていれば、
こうはならなかったかもしれない」
「それに彼女にもそれなり以上の
理由はあったんだろう。
この体を手に入れて、なんとなく
俺にも彼女の内面は伝わってきていた。
だが……」

「それ以上に俺は、
永遠にトリスタンの。
理想の体を手に入れて」
「これからこの体で、どんなことをしようか」
「そんなことを
考え続けているのであった」